

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2692600162		
法人名	社会福祉法人 空心福祉会		
事業所名	グループホームえるむ(バジルユニット)		
所在地	京都府福知山市旭が丘92-2		
自己評価作成日	令和4年5月9日	評価結果市町村受理日	令和4年7月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detaji_022_kani=true&amp;JkyvvoCd=2692600162-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detaji_022_kani=true&amp;JkyvvoCd=2692600162-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地1「ひと・まち交流館京都」1階
訪問調査日	令和4年6月2日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・京都府北部で初めて認可を受け開設したグループホームとして、手探りの中で入居者の感情豊かな、いきいきとした暮らしの支援を目指し取り組んでいます。「できることは可能な限り自分で、できないことは協力して、できないことは代行して」を基本に、入居者様の個々の力、協力し合う力、必要な支援の見極めをスタッフ間でしっかりと行うように努めています。  
 ・買物、散歩、季節に応じた外出等、外出をしてホームの中だけでの生活ではなく、地域に出かけ、ともに季節を感じ、気持ちを共有できるように取り組んでいます。コロナ禍の為、現在は実施できていませんが、例年は、入居者様や運営推進会議から意見を取り入れ企画し、思い出に残る旅行や、個別の思いを実現するための外出等の機会を多くもつようにしています。生活に根ざした楽しみ、昔馴染みの仕事、季節感のある保存食作りや季節の菓子作り等に力を入れています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

高齢者複合福祉施設えるむ(グループホーム18名、特別養護老人ホーム29名、ショートステイ10名、デイサービス6名)は、社会福祉法人空心福祉会の傘下として2012年3月に開設されました。現在、グループホーム利用者の平均年齢は88.1歳、平均介護度2.4です。コロナ禍で週2回は、身体を動かす運動(風船バレー、ボーリング、パターゴルフ)などを取り入れ、定着しています。ペランダに出たり事業所内屋上も散歩、エレベーターホールに設置した5段の階段を活用しての筋力維持にも努めています。利用者の諸意向を聞き取る「みんなの広場」を月1回開催して、それぞれのニーズを日々の生活に反映させています。介護記録ソフト「ケアコラボ」を導入しており、介護記録や利用者の様子を、家族はタブレットやスマホ、パソコンで見ることができ「様子が分かり安心です」との声が届いています。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ありがとうございます、地域で創めるこれからの暮らし」を施設理念とし、法人の福祉サービス方針、ホームの福祉サービス目標の中でも、地域社会の一員としての生活を支援していくことを掲げている。	法人理念と施設理念の基、単年度福祉サービス目標「利用者の日々の生活の質を高め、充実した生活が送れるように支援する」と掲げ、具体的に行動計画を表記し実践している。ケアワーカー、ケアマネジャーの職種別目標もある。各会議で話し合うが、基本6か月で振り返りをおこない、1年で総括し事業報告している。理念など朝礼時に唱和している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域とのつながりは十分とは言えないが、近隣の児童センターの文化祭への作品出品や20.2.3に地域との防災協定を結び、避難訓練時には連絡網の確認をしている。また、地域から回ってくるお便りを回覧板として活用し、みんなの広場で紹介している。地域の資源回収には、段ボールを出させて頂き、協力を行っている。	自治会に加入しており、回覧板が届く。コロナ禍で地域の行事はほぼ中止であるが、自治会の資源回収に段ボールを提供したり、社会福祉協議会にペットボトルのキャップを届けるなど活動は継続している。利用者の中には、行きつけの理美容院を継続している方がおられる。コロナ収束時には、地域の方を招待して施設の夏祭りや、児童センターとの交流を再開する予定である。小学4年生の福祉授業への参画は、今年から再開を予定している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議において、高齢者の暮らしの実態、施設に求める事など、様々な意見を聞き、話し合うようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回実施し、福祉サービス目標の進捗状況(取り組み内容、行事、事故、外出)、現況を報告し、意見交換の機会を持っている。コロナ禍である為、会議は書面開催としているが、意見聴取に伺い直接意見を頂いている。	運営推進会議メンバーは、家族代表2名、自治会長、市高齢者福祉課職員、地域包括支援センター職員、事業所職員である。議事録には、利用者状況、行事や外出実績、ヒヤリ・ハットや事故の報告がされている。自治会長からは、地域情報を得ている。会議メンバーからの施設サービスに関する意見や助言が少ないように思われる。家族に運営推進会議への出席依頼はコロナ禍でおこなっていない。議事録は全ての家族に送付している。	運営推進会議は、施設の提供している各種サービスに対して、意見をいただく貴重な会議である。意見や助言を多く得るために、地域メンバーの増員をされてはどうか。また、より詳細な報告で活発な意見交換を期待する。

京都府 グループホームえるむ(バジルユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の参加者に市担当者、地域包括支援センターから1名ずつ参加して頂いている。書面にて事業所の取り組み状況を報告し、直接聞き取りを行い意見や市からのお知らせを聞くことができる。	市の職員は運営推進会議メンバーである。日頃から協力関係は樹立しており、相談や助言を受けている。管理者は、福知山民間社会福祉施設連絡協議会に参加して、他の事業所と情報共有や協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修等を通じ、身体拘束について理解を深めている。身体拘束0を継続して取り組むことができている。また、エレベーターにも暗証番号は設定しておらず、入居者も自由に使用することができる。	「身体拘束適正化のための指針」を作成している。委員会はえるむ全体で、3か月ごとに開催している。身体拘束廃止研修は年2回実施している。利用者を待たず場合は、待つ時間を伝えるように統一している。利用者は施設内は自由に行き来できる。以前に利用者の離脱事故があった。大事には至らなかったが、以後、玄関は中からは出られない。希望があれば職員が共に散歩に行き、疲れたら車で迎えに行っている。法人として、離脱が起こった時は、メール(写真付き)で全職員に捜索要請がある。警察に通報など手順書が作成してある。また、福知山民間社会福祉施設連絡協議会からも各事業所に連絡がいく。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内や部所の研修を通じ、人権や虐待について学ぶ機会を持ち、虐待防止の徹底に努めている。内出血等についても原因を究明し、入居者の言動等、小さな情報もスタッフ間で共有したり、言葉遣いの見直しを職員間で取り組む等、常に虐待や人権侵害がないように日頃より注意を払っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	人材育成委員会主催の全体研修や、新入スタッフ研修においても、権利擁護をテーマに取り上げて教育を行い、権利擁護についての理解を深めることができるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書、重要事項説明書を確認する際には、施設長が同席し、入居者、家族等の入居への思い、不安、希望等、十分に話を聞き対応するようにしている。入居後も、利用料金等への詳細の問い合わせ等にも適切に対応して。退居時も入居時と同じく、十分に話し合いをもち、不安なく次の生活に移ることができるように努めている。		

京都府 グループホームえるむ(バジルユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者家族へ満足度調査を実施し、頂いた意見については家族への返答を行っている。また、定期的にご意見用紙を送付し、意見を頂ける機会作りを行っている。	顧客満足度調査は集計して、意見、要望に対しては丁寧に回答している。ホームページで公開するとともに、家族には郵送している。家族からは、ケアコラボからコメントや要望が随時届くようにしている。利用者の事が多く「眼鏡をかけさせて」「季節にあった服を着せて」など、ケアマネジャーは申し送り欄に入力して、職員間で共有している。利用者の意向は常に聞き取っているが、月1回利用者の自治会「みんなの広場」を開催し、細やかにニーズの把握に努め、行事やイベント、レクリエーションに生かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度、代表者会議、スタッフ会議を開催している。その中で、スタッフからの意見や起案を検討し、実施できるようにしている。また、問題点や伝達すべきことも話し合っている。	毎月のユニットミーティング、ミモザ会議(グループホームのみ)、スタッフ会議(えるむ全体)で職員の意見を吸い上げている。エアコンの修繕、ケアコラボの使用法の質問、下肢筋力強化の昇降階段の希望など、昇降階段(5段)は、他施設より譲り受けリノベーションしている。リーダーは年2回職員との個人面談をおこなっている。職員は年間の個人目標を提出し、自己評価もおこなっている。これ以外に、部長面談が年3回、管理者面談もあり、上司に意向を伝える機会が多い。また、職員はミモザイベントを企画し、ゲームや寸劇、球技など、利用者を楽しみを提供している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各スタッフが向上心を持って働くことができるよう、キャリアパスやSDSシステム等を導入している。また、ケアコラボ(電子記録システム)を導入したことで、記録に関わる業務の軽減につながっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新入スタッフ研修、OJT、人材育成委員会主催の全体研修、部所内における研修、外部研修への派遣を行い、人材育成に力を入れている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	福知山市内の福祉施設で組織する福知山民間社会福祉施設連絡協議会が主催する、研修会等を通じて交流を行いサービスの向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居事前調査、入居事前面接、契約時等から、本人や家族のニーズ、不安等を聴き取れるよう、関係を築くことに努めている。入居当初も不安や悩みを聴き、特にケース担当を中心として信頼関係を築けるよう努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居事前調査、入居事前面接、契約時等から、家族の不安、利用に至るまでの経過、希望等を聴き取れるよう関係を築くことに努めている。場合によっては、入居までも家族の不安や相談に乗り、こまめに電話などで連絡を取り合うなど、家族の心身状況等への配慮も心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当施設への入居だけに拘らず、現在の生活、今必要としていること、本人、家族の思いに適したサービス等を含め、可能性を広げられるよう、随時、傾聴、助言をするように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護を受け、施設で穏やかにのんびりと過ごして頂くというのではなく、他の入居者やスタッフと喜怒哀楽いっぱい力を発揮し、支え合える暮らしを目指している。保存食作りなど、馴染みのある作業を通じ、スタッフが教わる機会も多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の思いに心を傾けながら、家族もサービス提供者の一員として共に支えることができるよう、常に情報を共有できるよう努めている。施設の広報誌やケアコラボなどを通じ、生き生きとした暮らしの様子を伝え感じて頂くことで、家族も一緒に支援して頂けるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が大切にしている人、もの、場所等の把握に努め、可能な限りその人らしく暮らし続けられるよう支援に努めている。コロナで外出が難しいこともあり、孫の結婚式にはリモートで参加していただいたり、馴染みの美容院へカットへ出かけて頂く取組を行っている。	コロナ禍では、家族とはオンライン面会をおこなっていた。孫の結婚式には、リモートで参加された方がおられる。外出が制限される中、趣味の継続を支援しているが、写経ができなくなった方もいる。裁縫や花壇で野菜や花を育てるなどの支援をしている。6月16日から対面の面会(10分程度)が許可されている。毎月職員は広報紙「こちらえるむです」に利用者の写真とともに近況を書き、家族に届けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	毎日の暮らしの中で、スタッフとの関係だけでなく、入居者同士の関係を把握し、共同生活を支援できるように努めている。一緒に何か作業をして頂くことを心掛け、食事作りや洗濯物干し等を行っている。また、食事席等も利用者の関係を考慮しながら配席している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホームでの生活が困難となった入居者が契約終了となり、併設の特養入居となっても、訪問しあったり、行事等では特養との交流もあり、関係性を継続することができている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いに寄り添い、困難な場合でもその方にとってどうか、どうされたいと思われるだろうかと考え、入居者本意に対応できるようユニット毎に検討している。また、日頃からの思いの傾聴に努め、「私の姿と気持ちシート」への記入、みんなの広場での意見聴取を行い、把握に努めている。	アセスメントシートで生活情報を得ているが、「私の姿と気持ちシート」も使い、より詳細に把握している。毎月おこなう「みんなの広場」では、利用者から、生活全般のこと、食事のこと、見たい映画、その他いろいろ聞き取っている。現在、意思表示ができない利用者はおられない。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居事前面接等だけでなく、入居後も本人、家族から聴き取り、また、「私の姿と気持ちシート」を作成する等、日々の中での把握、情報の共有に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	事前情報だけでなく、日々の中で理解し、見極めるように努めている。日々の様子などは記録にも残していくようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族からの意見を聞き、ケース担当、ケアマネジャー、他スタッフの意見等を踏まえ検討し、介護計画を作成している。	利用者の担当介護士は、10日前後を目安に、各課題ごとにサービス提供時の利用者の状況や観察したことなどを記録している。短期目標期間(3~4か月)ごとや必要に合わせ、サービス担当者会議を開催し、モニタリングをおこなっている。会議には利用者、家族の参加がある。家族、介護士、ケアマネジャーの検討内容の記録があり、医療情報は適宜得ている。ケアコラボは家族共有機能があり、介護記録や写真、動画で利用者の様子が分かり、家族のコメントが寄せられる。	

京都府 グループホームえるむ(バジルユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録、介護計画のモニタリングを個別に記録し、情報共有を行い、日々のケアにいかせるようにしている。家族とのやりとりについては、相談記録に記入し残している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	状況、要望に応じ柔軟に対応するように努めている。面会時間、外出、外泊等の支援、馴染みの理美容の利用等を継続して頂いている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	サロンなどを活用し入居者が利用できるよう支援していたが、新型コロナウイルス流行後は外出ができず、支援することができていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時または必要時、本人及び家族の希望医療機関を利用できるよう支援している。必要であれば施設から連絡し、Drに相談や指示を仰げるように連携が取れている。	利用者は、入居前のかかりつけ医を継続しており、家族とともに受診している。必要に合わせて施設から情報提供をしている。医師の往診は基本的にはない。緊急時には併設施設内の看護師に相談することができる。夜間の緊急時は、部長(ケアマネジャー)が駆け付け、家族に連絡し、家族の希望により対応している。救急搬送時には、部長が同行している。利用者の希望で歯科往診を受けることができる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同一建物内に特養があり、NSと相談をしながら日常の健康管理を行い、適切に医療を受けられるよう連携しながら支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	Dr、NSからの情報、地域相談室等の職員と連絡を取り、早期退院に向け連携を図るよう努めている。コロナウイルスの影響で面会へ行くことができない為、入院中の様子を病院に確認し、状態確認も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態に応じ、早い段階から意向、希望、施設としての対応、医師の判断等確認し、本人、家族と相談していくことを心掛けている。施設として対応ができる可能性、限界についてはしっかりと見極め、支援に向けて取り組んでいる。可能な限り、また、本人、家族の意向に添えるよう対応している。	法人は「看取りに関する指針」を作成している。施設では、看取りの体制が整っていないため、積極的には取り組んでいない。施設方針や対応は、契約時に説明をおこない、サービス担当者会議でも、家族との話し合いは続けている。ほとんどの方は、系列の特別養護老人ホームでの看取りを希望される。この10年間で、施設内での看取りは2例である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的な応急手当の訓練は行っていないが、「緊急時対応マニュアル」を作成し、緊急時の対応に備えている。また、総合防災訓練時には、胸骨圧迫のレクチャーやAEDの取り扱い訓練を実施している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、昼間、夜間想定で避難訓練を実施している。また、地震から火災が発生した想定で訓練も行っている。自治会との連携を図る為、訓練時には自治会長へ連絡網の確認を行っている。また、水、食料等の非常食をホーム内に備蓄している。	えるむ全体で、年2回(日中、夜間想定)避難訓練(地震、火災)を、利用者も参加して実施している。年1回は消防署の立ち合いがあり、消火器訓練、消火栓の取り扱いの指導もおこなわれている。福知山市旭が丘自治会と防災協定を結び、避難訓練時に自治会長へ連絡網の確認をしている。現在はコロナ禍のため、招集はしていない。備蓄は水、食料品など3日分がある。AEDを設置し使用法の周知をしている。過去に土砂崩れがあった際には、被害にあわれた方を受け入れた経緯がある。BCP(事業継続計画)を作成中である。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人で作成したマナー規範を入職時に配布している。また、掲示板にも掲示し啓発を行っている。入居者の呼名は入居時に確認し、統一した呼名で声をかけられるように支援している。	入職時に「マナー規範」を配布している。事業所内に掲示し、接遇やプライバシーについて伝えている。研修や会議でも職員に伝え、参加できない職員には資料を配布している。呼称は入居時に利用者や家族に確認し、利用者の希望の呼称で統一している。排泄時や入浴時は希望がある場合は、同性介助でおこない、羞恥心には十分配慮している。職員の言動が気になる場合は、利用者から離れて職員と話し合い説明している。	



京都府 グループホームえるむ(バジルユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者の理解力を把握し、個々に応じての声掛けや、希望の聴き取りを日頃から行っている。場面に応じた自己決定を、できるだけ自身で納得ができるよう支援し、自分らしく暮らせるよう努めている。1回/月の自治会を開催している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務や、スタッフの都合優先ではなく、入居者のその日、その時の思いを大切にしながら暮らしを支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎日の身だしなみ、外出、行事等の際のおしゃれは、その人らしさ、清潔感を大切に支援している。また、理美容は本人、家族の希望を聴き取り、希望の店を利用できるように対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	同一建物内にある特養の管理栄養士が作成した献立を基にしなが、好みや季節に合った食材に配慮し柔軟に対応している。調理等食事の準備、片付けを共に行っている。	施設内の管理栄養士が献立を作成し、主菜は厨房で作、ご飯、汁物、小鉢を職員と利用者が、季節や好みも考えて作っている。利用者は、調理をする、食器を洗う、座って食器を拭くなど、できることで役割がある。行事食や月2～3回のセレクトメニュー(利用者が選ぶ)では、鍋、たこ焼き、焼きそば、焼き肉などは好評である。おやつはホットケーキや団子など、利用者の好みのもを作っている。年2回のミモザパーティーでは、バイキング、レストラン、屋台形式で提供がある。また、らっきょ漬けやリンゴジャム作りなど、単年度事業計画に組み込み取り組んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	同一建物内にある特養の管理栄養士が作成した献立を基にし、量、栄養のバランスを確保している。一人ひとりの摂取状態、好みに応じ介助等行っている。補食としてのおやつ等も個別に対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎日の義歯洗浄剤の使用、食後の歯磨き等、入居者個々の状態や力に応じ支援をしている。口腔衛生についての研修を受けるなど知識の習得、資料の共有などしている。		

京都府 グループホームえるむ(バジルユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個別の排泄パターン、使用しやすいトイレ、適した排泄用品、介助の仕方等情報を共有、検討し、個別に応じた支援をしている。排泄用品は、本人に適した物を使用している為、様々な種類の排泄用品を使用している。	一人ひとりの排泄パターンを把握し、声かけや誘導をおこない、日中はトイレでの排泄を支援している。布パンツ使用の方で、その日の体調により、リハビリパンツを使用するや、夜間のみ使用するなど、その方に合わせ支援している。介護者2人での介助もある。ポータブルトイレの使用者がおられ、居室にいないが残らないように、排泄後すぐ処理するように心がけている。排泄用品は本人に適しているか職員間で検討し、家族に同意を得ている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の原因、影響について理解し、水分・食事摂取、運動等を支援している。それでも改善しない場合には主治医と相談し、下剤の処方等で対応を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴に関しては、週2回以上を基本として、日中に対応している。意に添わず、入浴されなかった時には日を改めて入浴日を調整しています。希望されれば、好みのシャンプーやボディソープを個別に持ち込んで頂くこともできます。入浴後には、スキンケアとして保湿剤を塗布して、皮膚トラブルを予防しています。	入浴は週2回以上を基本とし、日中に対応している。同性介助は希望によりおこなっている。好みのシャンプーやボディソープなどを使用している方もある。以前シャンプーハットを使用していた方もあった。入浴時は安全に注意し、個人に合った湯加減で提供している。また、ゆっくりと話し相手になっている。入浴拒否の方には、時間や日を変えたり、特定の職員の声かけなどにより、無理なく自然に、自ら入ることができるように対応している。菖蒲湯や柚子湯の提供もある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午睡や就寝時間、就寝前の習慣等、一人ひとりの生活や状況に応じ支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	疾病、処方薬、注意点について理解し、入居者の力に応じ服薬を支援している。随時処方薬については特に服薬中の変化に注意し、必要に応じDr、家族に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの力を活かし、生活に根ざした役割を持って頂けるような支援(家事作業・手芸等)、趣味を楽しめる環境作りの支援を行っている。		

京都府 グループホームえるむ(バジルユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節を感じ、気分転換を図ることができるよう、季節に応じた外出(花見、紅葉狩り)等、希望やその日の天候に応じて支援している。	コロナ禍で日常的な散歩はできなかったが、最近公園の前までの散歩は許可がでている。ベランダ1周や空庭(屋上)での散歩を奨励していた。空庭では、自然に恵まれた景色を眺めて楽しむことができる。また、花壇でキュウリやプチトマト、花を育て、稲作にも挑戦している。草とりや水やりは利用者の担当である。ドライブでは花見や紅葉狩りに行き、車窓から眺めるだけではあるが、季節を感じ楽しめる支援をおこなっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持し使い使えるように支援している	人居時、希望や能力に応じて持つて頂けるよう支援することを説明している。お金を管理されるかどうか本人、家族へ確認し同意を得ている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	必要に応じて、電話を利用して頂けるように支援している。また、家族から電話がかかってきた際にも取次ぎ、会話をさせて頂く事ができている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔感を大切に、安心して快適に過ごしたり使用できるようにしている。また、リビングに一人がけ用のテーブルやソファを置き、ゆったりと過ごしたり一人になれる空間を確保している。季節感を出す為、入居者と作成した飾りを飾ったり季節ごとのウォールシールを貼っている	リビングは広い。食事のテーブルとソファは離して設置してあり、一人ひとりがゆったり座ってくつろげる配置である。利用者の作品は、兜の飾りや小さい鯉のぼり、風船の鯉のぼりなどが飾られている。掃除は職員が、毎日おこない、清潔に留意している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者の状態、関係等配慮しながら、常にフロア内の見直しを行いながら、入居者が居心地よく居られるよう配慮している。共用空間の中にいくつか居場所を作り、1カ所に集まらなくても過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人、家族と相談しながら居室の環境を作っている。使い慣れた馴染みの物、本人の作品、家族の写真等を持ってきて頂き、居心地が良い居室になるように工夫している。	自宅で使い慣れた馴染みの物の持参などを伝えている。釘や押しピンなどの危険物、ペットの持ち込みは断っている。筆筒や家族の写真、自分で作った物、職員の手作り品など設置してあり、炬燵や仏壇の持参もある。掃除は職員が、床と洗面台は毎日おこない、10日に1回は隅々まで丁寧に掃除をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ゆったりと安全に暮せるスペースの確保をしている。可能な限り自立した生活が送れるよう使い易い配置等工夫、配慮をしている。		